

連載第六回 25～30 (完)

抄訳 井手淑子

《第24回までのあらすじ》

主人公の林家宝（幼名は小宝）は、南京に生まれ、日中戦争が始まった1937年には小学校4年生。日本軍は少年の心を傷つけ、日本鬼子に対する怒りと祖国への熱い想いを抱かせた。

抗日戦争の初期、多くの人々は蒋介石を支持し、国民党への信頼を寄せたが、戦争の長期化と共に、共産党および紅軍への期待と解放区、新四軍への参加も広がって行った。

小宝は姉やその友人たちとの交流の中から、ロシア革命、フランス革命、第1次大戦をはじめ、ゴークキー、巴金、エドガー・斯诺など多くの作品を通して、社会を知り、自分の将来を中国の将来と結び付けて考えていった。それは科学的社会主義や中国共産党へとつながる道でもあった。

1945年、日本が降伏し、人々は待ち望んだ平和の訪れを期待した。しかし、蒋介石はあくまでも共産党の撲滅を重視し、内戦が始まった。裏切られた人々は、老蔣への信頼を失くしていった。戦後の厳しい生活の中でも「反飢餓 反内戦」の激しい運動が各大学、地域でおこり、大きな大河への確実な流れとなっていた。

林家宝は上海の復旦大学に入学。歴史と民主的な伝統のある新聞学科の門をくぐった。

*この連載は、ホームページ 時事評論士 ンヤン欄でご覧いただけます。

三輪車を雇って復旦大学に着いた林家宝（小宝）は正門の大きな8

文字《學術独立・思想自由》を目に

して、新聞学科での受付をすませ、

学科主任の陳望道先生にも会えた。

教授は浙江なまりの普通話で、に

こについて、なぜ新聞学科に学ぶの

かを訊ね、林家宝は『もともとは理

工科で科学による救国を考えてい

ました。でも現在の中国では、科学

が国を救うのは、もっと先の理想だ

と思います。今最も必要なのは、広

大な人民を目覚めさせることです。

だから一新聞記者となり、わが国お

よび世界のことを事実 に即して多

くの人民に報道する、れが重要な仕

事だと思いました。』と答えた。

男子学生の宿舎は、2力所、かつ

ての日本軍兵舎であった。

一部屋に上下のベッドが5つ、10人に椅子のない二つの長い机があるのみの、全く粗末なものだった。

学生会が各新入生につけたお世話役の上級生は、教科の選択や、食堂での食券買い、最初の食事にも付き合ってくれた。栄えある《復旦人》になったことが嬉しく、最初からこの著名な大学を好きになった。

上級生が学内を案内中に、「復旦大学学生自治会」の看板を見つけた。しかし《5・20》後、学校側が大量の学生を除籍し、自治会も閉鎖されたとのこと。林家宝が自分もこのデモに最前列で参加したと話す、進歩的学生だと知った上級生は、復旦大学には革命的伝統があり、学生運動が強いので、国民党や三青团との闘争も激しく、犠牲になった一部

の学生は、解放区に行き、李先念の部隊に参加して行ったこと、新聞学科は復旦の進歩勢力が最も強く、復旦の《解放区》と呼ばれていると話した。それを聴きながら、林家宝は、そんな学科に入れて幸せだと、つくづく思った。

林家宝は、上級生のサークルに入るのではなく、自分たちでサークルをつくりたいと、友人と相談した。ある学生は、新聞を学ぶ者として当然だとすぐ賛成したが、別の一人は、『サークルをつくって何をする？』学校は許可するの？』と、否定的だった。蘇州出身の彼の頭には、左翼学生と「一線を画せ」という校長の教えが刻まれていた。サークルの結成は認められていたが、林家宝は、焦らず、高すぎる目標を求めず、みんなの願いに基づいて、みんながや

りたい活動を繰り広げることの大切さを実感した。

そして、サークルの名前が決まった。《NEWS社》、すなわち、中国名は《東西南北社》で、四方八方から来たとの意を表している。

26 中国の未来はどこ?

多くの学生は新聞記者としての経済的な安定を求め、地主の息子などは、思想的には正統派—国民党と蒋介石を信奉し、孫中山の三民主義にもとづく富国強大な国家を望んだ。

しかし、この1年の情勢に戸惑う者もいた。国民党軍はアメリカ式の装備、飛行機もタンクも大砲もあるのに、なぜ共産党をやっつけられず、人民はなぜ共産党を支持するの

か?疑問だった。

1947年10月、浙江大学生自治会主席が国民党政府に逮捕され、獄中で殺されたとのニュースは、多くの学生の怒りを巻き起こした。ひっそりとしていた復旦大でも、地下党の呼びかけで、一日ストを決行、参加した学生は300人以上となった。国民党特務ら十数人が猛スピードで大字報を破り捨てた。

除籍された9人のうち、林家宝のクラスの女子学生は、教室の窓からツバを吐いたとの理由で、全くの濡れぎぬだった。クリスチャンの彼女は、このファッショ的な行為に対し、左の頬までも差し出せないと冷静に考え、以後積極的に学び、発言した。字も上手で、大字報に顔真卿流の字を書き、右派学生から『この大字報の中身は悪いが、この字は本当

に美しい』と言われた。

NEWS社のある日の討論会は
《我々の国家の将来》と題し、二人
が話した。林家宝の友人、韓大平は
『8年の抗日戦争からようやく勝
利し独立を勝ち取った。老蔣は、過
去の教訓に学び、全国の各党派、団
体を団結させ、協力して我が国を建
設すると思っていた。内戦で人民を
安心して生活できない目に遭わせ
るなど思ってもみなかった。僕は我
が国の前途はこの戦争で決まると
思う。もし正義の方が勝利するなら、
中国は新しい民主主義社会を歩む
だろう。』と述べた。

もう一人のコン源根は、『抗日戦
争の勝利後、蔣委員長の下に一致協
力すると思っていた。内戦の勃発と
拡大は国共双方に責任があり、双方
が改めて話し合いのテーブルに着

き、平和的解決を取り決めるかどう
かにかかっている。また孫中山先生
の三民主義に従って建設していく
べきで、共産党が言う新民主主義と
かをやるべきでない。漸進的、温和
な方法で我が国を進歩させる。僕は
革命ではなく改良を主張する。』と
述べた。

二種類の完全に異なる視点は、激
しい議論を呼び、様々な思想の流れ
が大河の如く、大学生に迫った。
彼自身も考えた。林家宝たちのよ
うな純真で愛国的な青年、戦争好き
ではない彼らが、こんなに過激にな
り、なぜ老蔣に失望しているのか？

27 越冬救援活動

全国最大の都市上海の、金持ちと
貧乏人との違いは大きかった。腹一

杯食べられない労働者とその家族、三輪車引き、露天商、行き倒れ、失業者、戦乱を逃れてきた人たち、路上の乞食たち。毎日の「道に凍死者」のニュース。1947年、最も寒い夜、一晩に500人以上が凍死した。国民党政府はこの年も救援活動と呼びかけたが、三青团の仲間はいない。上にお金を出さなければいい。』と笑った。しかし学校側は三青团に多額の活動費を与え、大きなトラックも用意した。ラシヤや毛皮のコートにハイヒールの学生たちは、出かけてすぐに逃げだしたが、学校側はすでに彼らに《募金》を用意していた。

一方、中国共産党地下組織は、この公然の機会に学生たちに救援活動を呼びかけ、1000人ほどが参

加した。住民たちは、学生がやるなら『安心だ。国民党政府のポケットに入ることはない。』と、家から現金や衣類、布団を持ってきた。もとのフランス租界の洋館にも宣伝したが、誰も関心がなく、むしろ労働者地域、庶民の住む路地の方が募金が多いことを体験した。十日間で5万着以上の防寒着と8000万元以上のお金を集めた。衣類や救援金を渡しに行ったスラムの、草屋根と木のバラック小屋からは、溝の臭いが鼻をついた。ベッドに横たわる病気の老人。骨と皮ばかりの子供。その帰り道から議論が始まった。

『上海で生まれ育ったが、スラムへ行ったことはなく、知らなかった。』 『僕たちは甘肅出身で、貧しく遅れているが、外灘のある美しい上海に、こんなに貧困にあえぐ

人々が。全国ではどんなに多いだろう

うか?』『なぜ中国はこんなに貧し

いのか、どこに原因があるのか?』

『これは全くの社会問題だ。中国は

共和国ではあるが、半封建的、半植

民地だ。帝国主義と封建主義に加え、

官僚資本主義が、頭上を抑えつける

『三つの大きな山』となっている。』

林家宝はこの現実から「階級的視点」

を学んだ。この古い社会をひっくり

返し、徹底的革命を!と思った。

教育部(文部省)は、復旦大学学

長への秘密の電報で、左翼分子たち

の活動と認め、主要人物を掲げ、調

査を命じた。その結果、学校側は17

人の成績を全て59・9点と不合格

にした。しかし、学生たちは一笑に

付した。彼らは、国民党政府を打倒

せず、この旧社会をひっくり返さず

に、勉強だけいい成績をとってもど

んな意義があろうか?と考えた。

28 立ちのぼる煙

越冬救援活動は学生たちの自覚

を高め、団結を促した。NEWS社

は新しい仲間を迎え、叔父が国民党

政府の高官である女子、甘肅からの

役人の家庭の4人なども参加した。

1948年1月、九龍の飛行場拡

張で多くの民家が壊され、反抗した

住民の一人が、ホンコン英国当局に

殺された(九龍事件)。国民党政府

はこの事件を利用して、学生たちの

「反米・反蔣」の気分を変えようと

した。

地下の共産党指導部(上海学連)

は、イギリス帝国主義への抗議をい

ち早く組織し、全市74の大学・中

高の代表は、一日ストとデモを決定

した。2万5千人以上のデモ隊は、
黄浦江沿いのイギリス領事館に抗

長は市全体への影響を恐れ、命令を
執行しなかった。

議文を渡し、『イギリス帝国主義に
抗議する!』と叫んだが、南京路に
来た頃には『打倒米英帝国主義!』
『奴隷外交反対!』『反動政府はつ
ぶせ!』と叫び、待機中の軍警ボス
が鎮圧しようとしたため、デモの責
任者が解散を命じた。

三青团の責任者は、今回のデモが

さらに国民党政府は、電新九工場
のスト中の労働者たちを捕らえ、厳
しい拷問を加えた。同じ頃、上海の
ダンサーの女性数千人が社会局に
突進し、その場で痛打された。全市
の人民の怒りの波に直面した上海
市は、やむを得ず、学生たちを釈放
した。

やはり左翼分子に主導権を握られ、
しかも自分たちの政府の打倒まで
叫ばせ、首をうなだれた。また国
民党政府は、進歩的学生の手にあっ
た国立同済大自治会を弾圧し、数十
人を除籍・処分した。抗議ストと支
援の学生たちに、米軍顧問団を含む

逮捕された学生たちは、国民党と
老蔣への幻想を捨て始めた。獄中で
聞く、労働者を殴打する拷問の音は、
彼らを教育した。いつでも大学の校
門から除籍される心の準備をさせ、
また共産党への加入をも決心させ
た。

1万人の軍警が対峙した。その結果、
200人以上が逮捕された。蒋介石
は同済大の解散を命じたが、上海市

復旦大学の地下党は、更に粘り強
く、地道な活動を展開し、多くの中
間的な学生や三青团員、青年軍人を

も含めた愛国的な勢力を育てることを決意した。春に始まった「反米扶日」(アメリカ帝国主義による、日本の軍国主義復活に反対する)運動でもそれを貫こうとした。

林家宝はNEWS社での新聞発行の他、学習や映画鑑賞、読書会、時に遠足など幅広い文化活動にも力を注いだ。演劇や『黄河大合唱』も1000人規模でとりくんだ。

29 夜明け前の暗闇

1948年9月、NEWS社の新学期最初の討論会のテーマは、『卒業即失業』であった。卒業生30人中、一人だけが郷里の小学校教師の椅子を探せた。学生たちは、自分の未来を社会全体に結び付けざるを得なかった。

林家宝は、学科会の会長に推され、学科連合会にも派遣された。主に教職員にかかわる仕事で、陳望道、章チン以上の二人の教授を担当した。

陳望道教授は『僕はこの目で中国人民の解放を見なくては』と微笑みつつ、『君たち青年は幸福だ。僕は共産党創立の発起人の一人で、多くの若い労働者や学生運動指導者に会い、その勇敢さに感動した。しかし、大多数は犠牲となった。これはなぜか?今君たちの闘いは成功しつつある。それはつまりは共産党が成熟したからだ。一千万人の命と引き換えに、正しい方針は得られたのだ。』と言った。19歳の林家宝は、50歳もの高德の先生の言葉に、幸福感でいっぱいになった。

情熱家の章チン以教授とはよく会い、まるで友人のような関係だった。

た。教授は章益学長と何度も話して、彼が国民党の役職を持ち、学生運動を弾圧したので、共産党の処罰を恐

げて洗いに行く。太陽の光と新鮮な空気が吸える貴重なひとときである。

れ、複雑な心境であると分析した。

宋玉美は、小さな穴を通して隣の

11月下旬、上海の地下党は、大量逮捕の情報を得た。林家宝は蘇州の友人の祖母の家に避難したが、何事もなく、数日で戻った。

労働者と話し、勇気づけられた。しかし、12月のある夜中、彼は雨花台で生き埋めにされた。『幸い勝利の望みがある。死んでも満足だ。』

しかし、25日の深夜、南京で宋玉美が自宅で逮捕され、憲兵司令部の監獄に入れられた。鉄の門、鉄の鎖、電気を通した高い鉄条網の壁、そこから伝わる憲兵の巡回の革靴の音、男子房から聞こえるガチャガチャという足枷、手錠の音、看守の特務が誰かをぶつ音、大声で叫ぶ声。毎日カビの生えた、又は砂混じりのご飯と少しの漬物。少しのお湯。一面日に一度の風通しの時のみ、牢の入り口が開けられ、各自が便器を提

情勢の展開は、看守たちの態度も変え、手紙を出してやり、お金を握らせると、新聞を買ってきてくれた。地下党は各種の救援工作をやっていることを獄中の仲間知らせ、慎重な対応を望んだ。

2月中旬、宋玉美はついに釈放された。母は人民解放軍の血みどろの戦いのお蔭で娘の命は救われたと心から思った。

復旦大学の章益学長は迷った末

略した。この日、宿舎に戻ろうとした林家宝は友人に注意され、隠れ先の従兄の家に向かった。

に、三青团のボスからの台湾行きチケットを没にした。全学の教職員の前で、共に危機突破工作に頑張ると宣言し、会場のみんなから大歓迎を受けた。

26日夜、大勢の軍警が復旦大学を取り囲み、27日明け方、各宿舎に突入した。しかし、ブラックリスト上の学生はいず、適当に捕えて、数を充たした。出勤した1万人の軍

復旦大学の党総支部は、解放に備え「人民保安隊」「人民宣伝隊」「救援隊」などを組織し、積極分子や地下黨員などに、いつでも隠れる準備をさせた。

警は、上海の全大学を包囲し、352人を逮捕した。復旦では86人となった。

他方、一群、また一群と、遊撃隊に向かう学生たちに林家宝は『解放後に会おう！』と言いつつも、もしかしたら会えなくなるのではと思

さらに国民党政府は、全ての国立大学と一部の私立大学および中高の閉鎖を宣言した。学生たちは混乱に陥ったが、以前からの準備により、ネットワークを回復した。章益学長も学校経費からお金を出し、学生たちの食事の手当に援助した。教授会

4月21日、人民解放軍はついに長江を渡り、23日一挙に南京を攻

は1000銀元以上を集め、自治会主席の林家宝が絹のコートに礼帽、

眼鏡で変装してある教授宅に行き、直接受け取った。

一方、囚われた86人は、たくましく、楽観的で、絶えず歌を歌っていた。憲兵たちも、これらの感動的な歌を習い覚えた。

一日一日と日がたつにつれ、見張りの憲兵は減っていった。学生たちは憲兵に『君たちはまだ老蔭にどんな命をかけているのか？ 自分たちのからのことを考えたら？』と働きかけた。

5月下旬のある日、目が覚めると立哨すら立っていないかった。嬉しくなった学生たちは、このチャンスを逃さず、四方に逃走した。86人が一人も欠けずに自由を獲得した。

5月25日の夜、蘇州河以南の解放が伝えられ、28日早朝の電話で『蘇州河以南も解放された。上海は

完全に解放された！ すぐに陝西北路128号の上海学連本部に来てくれ！』『わかった、すぐ行く』

林家宝は、野生馬の如く、飛ぶように駅に急いだ。早朝の空はぼーっと細かい雨が降っていた。一人の雨合羽の解放軍兵士が街角に直立しているのが見えた。

両の眼から涙があふれてきた。

(完)

訳者あとがき

1949年の中華人民共和国成立から70周年、近代化の中での初めての民衆運動である五・四運動から100周年を迎える。

学生時代に中国語を学んだ私がずっと抱いてきた疑問は、中国と日本で、近代化の歩みがなぜこんなにも違ったのか？ ということであ

る。その最大の理由は、清朝支配下の民衆の極端な貧しさ（文化的、経済的）に加え、中国がいち早く欧米列強の餌食となり、1840年のアヘン戦争以来の半植民地となったこと、15年に及ぶ日本の侵略・戦争、それに追い打ちをかけた内戦と、長期にわたる戦争・侵略による疲弊にあると思う。

1911年の辛亥革命で清朝が滅亡し、ヨチヨチ歩きを始めた中国に襲いかかった日本の侵略と戦争が、はかり知れない大きなダメージを与えたと言える。東北地方（かつての満州）各地に今なお残る日本のホテル、企業、役所、軍等の建物、果ては人体実験もなされた「731部隊」本部の建物ですら利用されているのを見ると、中国の当時の貧しさを思い知らされる。十数年前に程

極明氏の著作『洪流』を戴き翻訳を始め、2005年にお会いして、ほぼご自分の体験にもとづく作品だと知り、より多くの日本人に読んで欲しいとの思いを抱いてきた。幸い、日中友好協会京都府連左京支部の会報《友誼》に掲載の機会を頂き、大変感謝しています。しかし、原文は、492ページの中国語で、

紙数の制約もあり、思い切った抄訳とならざるを得ず、著者の思いに十分に迫り切れてはいない。また、例えば、当時の北京は北平（ペイピン）と呼ばれていたこと、中国の中学校は日本の中学・高校を指すこと、主人公の林家宝は小学校入学が早く、同級生で最も年下である等も言及できなかった。北伐を成功させた蔣介石は南京政府を開き、国民革命の実行者として、《老蔣》の愛称で呼

ばれるほど支持されていたが、抗日戦争の長期化と共に、徐々に信頼を失っていく。民衆が待ち望んだ抗日勝利後の平和は彼自身によって「内戦」にとって代わられた。多くの若者が悩み、苦しみ、逃れ、戦った。その莫大な犠牲の上に、現在の中国の発展があることを、中国の若者たちも知ってほしい。お訪ねした時、つつましい住まいの奥から聞こえた、夫人の弾く「インターナショナル」のピアノの音は、獄中の労働者から、処刑直前に教わって、獄中の彼女が勇気づけられた調べだと翻訳の終わりに知った。長い間ご愛読下さった皆様にお礼申し上げます。